八島直記伝記文学全集

島直記文学全集

第四卷

江苏工业学院图书馆
藏书章

小島直記伝記文学全集
第四巻
定価 三四〇〇円
昭和六十二年 一 月 十 日印刷
昭和六十二年 一 月二十日発行
著 者 小島直記
発行者 嶋中鵬二
印刷者 小林 清
発行所 中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七
振替 東京二―三四
©一九八七 検印廃止
ISBN4-12-402584-X

小島直記伝記文学全集　第四巻　目次

福沢山脈

刺客 9
ふるさと 32
新銭座 59
三田 76
演説 105
小男 133
三菱 165
支配人 190
世間 226
主筆 252
大隈重信 290

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

激動 321
金難女難 352
三井 390
群像 417
若旦那 450
やせ我慢 478
惜別 511
寒い日 553
あとがき 575

小島直記伝記文学全集

第四巻　福沢山脈

福沢山脈

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

刺　客

主人の食事がすんだので、お膳を下げようとしていると、

「ちょっと待て」

と声がかかった。書生の朝吹英二は、のばした手を膝にもどした。

「お客があるぞ」楊子をつかいながら、藤本箭山（せんざん）は言う。「わしの従弟の、お前も名前は知っとるじゃろう、福沢諭吉がくるそうだ」

「ははあ」

「福沢の母親が中津にいるのでな、東京でいっしょにくらすため、つれにもどるんだが、神戸から船が出るのを待つため、数日滞在したいと言うてきた。お前も大変だが、よろしくたのむぞ」

「はい、わかりました」

素直にあたまを下げて、台所にさがったものの、朝吹はむずかしい表情になって、腕をくんだのである。

主人の藤本は、九州中津の鍼（はり）医者であった。前年（明治二年）旧藩主奥平家の令嬢が四条家へ嫁ぐにあたって、お付役をして大阪（当時は、坂と書く）に出ていた。しかし妻子は郷里において、堂島の旧中津藩蔵屋敷に住んでいるので、飯たき、漬物つけ、ふき掃除、洗濯、風呂たき、薪わり、走りつかいなど、雑用はすべて朝吹がやらねばならない。

そこで、お客があれば仕事がふえるわけであるが、いま深刻な表情になっているのは、その世話がめんどうだと思ったからではなかった。そんなのんきなことではない。

（いよいよ来たか！）

と息をのむ思いだったのである。じつは主人に聞く前に、福沢の動きを知らせたものがいる。

その男は、増田宋太郎。朝吹と同年の二十二歳で、中津の塾でいっしょに学んだ仲間だ。その父親が福沢母堂の従兄なので、増田にとって福沢諭吉は又従兄の間柄となる。

ところが、増田は福沢を仇敵のように憎んでいる。理由はただ一つ、福沢が洋学者だからだ。水戸学と本居宣長の国学の洗礼をうけた増田はコチコチの尊皇攘夷論者、ご一新で天皇親政にもどったことはよろしいが、文明開化の風潮となり、国粋の美風を捨てて異国の猿まねをし、毛唐をありがたがるのが気にくわない。それも福沢などの洋学者が煽動するからで、元兇たる福沢は国家のために生かしてはおけない、と考えている。

親戚にあたるので、福沢帰省のことはすでに早く耳にしていた。大阪に出て旧友朝吹を訪ねたのも、いずれ福沢が藤本のところに滞在すると考えたからだ。

「奴がきたら様子をさぐって、場合によってはたたっ斬ってくれよ」

「承知した」

と朝吹は言いきっていた。

幕末から明治初年にかけての、外国人や洋学者にたいする反感と憎悪のはげしさは、今日の感覚では想像もできない。

前年九月、日本陸軍の創始者大村益次郎が京都で斬られた。下手人は国粋派で、斬奸状には「専ら洋風を模擬し、神州の国体を汚し、朝憲をないがしろにし、浸々蛮夷の俗を醸成す」と書

かれてあった。

増田宋太郎の考え方もおなじで、その考えをテロで実行しようと決意していることまでそっくりである。そこで福沢諭吉暗殺のことを旧友にたのんだが、朝吹があまりにも簡単に引きうけたので、満足よりも心配の方が大きくなった。

朝吹英二は「承知した」と言ったが、まるで遠足の約束でもするかのように、ほがらかな大声であった。暗殺という秘密計画のもつ陰にこもった情熱とはまるきり別のものだ。

増田の心配には、も一つ、朝吹の外見も作用していた。なんとなく、トボケた面なのである。第一に、頭がとびきり大きい。後年慶応のビィカーズ教授は「朝吹君のようにまんまるの頭は見たことがない」と言ったが、まるいだけでなく、人なみはずれて大きいため、帽子屋ではちょうどのサイズをさがすのに大汗をかいた。

チョンマゲをのせたその大きな頭の下の、面がまえがまた普通でない。九歳のとき疱瘡(ほうそう)にかかったため、いわゆるアバタ面になっている。福沢の養子になった桃介が富士登山の感想を語ったとき、

「遠くから見た富士は、冬は純白な雪に全身をつつまれ、夏はわずかに白髪をいただき、他はエメラルド色の衣をまとったうるわしい姿を見せていますが、さて登ってみると、赤や、黒や、茶褐色の石や、火山灰などで、遠くから見た美感をうらぎるばかりか、登山道のごときはあさましいまでに汚ないものでした。じつに富士と英雄は、近よるべからずとは至言です。なんのことはない、富士は朝吹君の顔といったようなものです」

と言ったので、人びとはドッと笑った。

ところが朝吹は怒らずにニヤニヤしていた。

（男は、容貌じゃない。美男子で出世したのは漢の張之房（ちょうしぼう）ただ一人。英雄は容貌熊のごとく、猿のごとしというのが原則である。だいたいツラというものは人間の看板じゃないか。看板の特徴は、一度見たら決して忘れぬところにある。ワシなど、その意味では満足じゃからなあ……）

彼の言うとおり、その醜悪ぶりはかえってご愛嬌で、とくに花柳界では大いにもてたものであるが、青年客気の増田宋太郎には、そういう人間の奥深いところは見えない。強いやつは強そうに、肩ひじいからせていなければならないし、暗殺者たるもの、くらい眼をギラギラさせ、ボソボソとつぶやくものだと思っている。

朝吹は、トボケた面をしている上に、声がまた大きいのだ。

この高声も、後年には彼の特徴として有名になった。コソコソ話など、ぜったいにできないのである。神経質な人間なら、彼としばらく話しているうちに、耳がガンガンいいはじめ、のぼせてしまってぐったりと疲れる。

木挽町（今の東京・銀座東）の自宅から大阪へ市外電話をかけると、その声は隣りの待合で手にとるように聞えた。

「まあ、あの声なら、電話でなくても、直接大阪のひとに聞えるでしょうに」

と女中たちが笑ったほどだ。

ともかくそういう男なので、増田は不安で仕方がない。

「本当にやるか？」

「まちがいないな？」

となんども念を押すと、

「ああ、大丈夫。きっと福沢諭吉を斬ってみせるよ」

と大声で答える。
「シーッ、声が高いぞ」
増田はあわてて家の外をうかがってから、
「それでは、吉報を待っているぞ」
と強く言って、引きあげた。
朝吹としては、決して（安うけあい）をしたつもりはない。（増田はどうも疑り深いのでいかんな）と気をわるくしたくらいだ。（オレをだれだと思っている！）
だれも見ていない部屋で、胸をそらせた。（オレはただの玄関番だと思ったら大まちがいだぞ）
この家の書生となったのは、前年の夏のことだ。藤本箭山が大阪に出たとき、朝吹はまだ郷里にいた。頼山陽の名文によって天下の奇勝として有名になった耶馬渓の近く、宮園村にその家がある。
そのうち、藤本についていった下男が病気になって帰国した。朝吹の兄嫁たみの里がこの藤本である。英二は、下男の代わりに自分がいきたい、と藤本夫人に申しこんだ。
「ご両親さえご承知ならばいいですよ」
という返事なので、両親に相談すると反対された。
「よし、そんなら脱走して行く！」
不動の決意を示したので、両親も折れるほかはなかった。
そういういきさつで大阪に出てきたが、無論、書生の仕事そのものが望みではない。その実体はバクとしてつかみにくいが、彼には〈大志〉があった。天下国家に名を知られる英傑になるのだ、という功名心といってもいい。

だが現実の仕事はまことにつまらない。飯たきその他、下男下女代わりの雑用をして給料は二人扶持、これを売ると一月に一分すなわち四分の一両になる。明治四年に新貨条例が出て、両を円ということになったから、月に一分は二十五銭の月給ということになる。

米一升が三銭しない時分であるから、ゼニの値打ちも今日とは比較にならないが、それにしても月収二十五銭也では酒も飲めない。

わびしくなると思いだすのが郷里のことであった。

耶馬渓は、もともと山国谷といったところで、宮園村はその一帯の渓流にそい、日田へ七里(二八キロ)、中津へ七里という中つぎ駅にあたる。その街道にむかってながめのよい高台に、朝吹家は立っている。山を背にひかえ、部屋は大小二十九室、ほかに土蔵や物置などもあり、遠くから見ると城のようだ。

家が大きいだけでなく、世間の尊敬もうけていた。十五代もつづいて土地の庄屋をつとめたから、年代的には徳川幕府の創業と相前後する古い家がらである。

幕府は全国の要所に直轄地をもっていた。これを天領といい、九州では豊前、豊後、筑前、肥後、日向など総計十八万石の天領があり、その支配にあたったのが日田の代官であった。

日田は代官役所を中心に発達し、日田商人の中には、代官の庇護をうけて諸藩の御用商人となって大きな資本を蓄積したものも出た。千原(丸屋)、広瀬(博多屋)、手島(伊予屋)、草野(升屋)、山田(京屋)、森(俵屋)などの諸家である。

毎年正月二日、九州各地の殿様たちは、代理として家老級の重臣を日田に派遣し、年賀のあいさつをした。あいさつには順番がきまっていて、徳川家から特別の庇護をうけている羅漢寺の住職が一番目だ。つぎが細川侯、肥後の殿様の家老で、以下順々に、各藩の重役たちがあいさつを

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com